

# ディドロとルソーの関係

山口 俊 治

Relation entre Diderot et Rousseau

Toshiharu YAMAGUCHI

(昭和46年12月1日受理)

ルソーは病弱で、孤独で、疑い深く、寡黙で、世間嫌いで、どこにいても必要以上に我が身の危険を感じ、自分の庇護者をも迫害者と思ひこみ、常に逃げまわっていた。ディドロは多血漢で、社交好きで、人を信じやすく、おしゃべりで、自分の友人のみならず、そうでない人々にも熱狂し、讃嘆の意を表した。と、このように、ルソーとディドロとを相反する姿として描くことは一般に異論の無いところであろうし、両者の性格を論ずる場合には、これは否定出来ない事実としてうけ入れられるであろうが、18世紀に於てこの2人が果たした役割をみると、両者の思想の間には多くの共通性があるようである。

これは、Montesquieu が第二身分であるところの貴族の出身であり、Voltaire が第三身分の、それも富裕なブルジョワの出身であったのに対して、ディドロとルソーとが共に、第三身分のうちでも一段低く見られていたところの職人階層の出身であったこと、互いに同年輩に近かったこと、啓蒙界に於ける2人の先輩、モンテスキュー、ヴォルテールの影響のもとに各々自己の思想を醸造し、彼らに対抗すべく、己の思想を発展させたこと、等々、時代的環境の類似性によるものであるが、より直接的には、彼らが本格的に著述活動を始めた29～30歳の頃から約15年間に渡って、彼らの間に極めて緊密な交友関係が、ルソーの側から言えば、最も緊密な親交、があったことによるものである。

以下、ディドロとルソーの同質性と異質性を、彼らの各々の思想形成の場と交友関係に於てみてゆく。

啓蒙家達の社交界に入ることになった動機、あるいは契機において両者のそれは大部異なるようである。ディドロはパリで遊学生生活を終え、以後30歳頃に至る迄の約10年間を、定職につくことを嫌い、自由を満喫し、知的好奇心を満すべく、人文科学、自然科学のあらゆる分野の学問に没頭し、ボヘミアンの極貧の生活にあって、多くの識者達と交友をもち、己の性向のおもむくまゝに意欲的に啓蒙活動に入ってゆくのであるが、このほゞ同じ10年間に於けるルソーの思想形成の場は牧歌的田園であり、家庭的雰囲気であった。

愛人であり、かつ母親的庇護者でもあったヴァラン夫人 (Mme de Warens) のもとに寄宿し、互いに「プティノ」「ママンノ」と呼び合う2人きりの、精神的にも肉体的にも満たされた穏やかな生活、農耕にはげみ、読書、自然の観察、等、「己の欲することのみを行う」というルソー自身の生活信条に一致した毎日を送っていた。外見的には依存的、もしくは隷屬的にみえる生活ではあったが、ルソー自身の言葉を借りるなら、「自分が自分自身であったところの、最も自己充足した日々」であったし、また、不安な健康状態のゆえに常に死の観念におびえていたルソーにとっては、夫人に依存した、このような生活は彼の独立心や自由への欲求をそこなう性質のものではなく、彼が必要としたところの「緊密な関係」であったのである。

この居心地のよい環境を失うことになり、経済的にも自立せざるを得なくなったルソーは、彼自身の考案による「記譜法」なる音楽上の試みをたづさえて、これを売り込むべく上京し、社交界に

踏み込むうちに、Condillac (Etienne de) や Holbach (Paul-Henri, barron d') や Diderot や Grimm (Frédéric-melchior, barron de) 等、後になって百科全書編集の中刻となった人物達と親交を結ぶのであるが、ディドロが思想そのものに対する興味から思想界に入ったのに対して、ルソーの場合は交友関係そのものにその欲求があった。今は失なわれてしまったヴァラン夫人との緊密な関係にかわるものを求めて啓蒙家達の社交界に入ったのであることを次のように述べている。

「私がその必要性を感じていたところの、あの緊密な交際を十分に味わうことが出来なかったので、私はこれに替わるものを求めていた。この代人物は緊密な交際の欠除から生ずる空虚感を、十分にはみたくれなかったが、それをより少なく感じさせるには役立つくれた。私には、私に全てをささげてくれる一人の友人が欠除していたので、私の無気力さの刺戟になるような友人達が必要であった。このような訳で私はディドロやコンディヤックと交際をもち、その結びつきを深めた。新しくグリムとも交友をもった。」<sup>(1)</sup>

以後、ディドロとルソーとは互いに無名の時代にあって影響し合いながら啓蒙的著作活動に入ってゆくのであるが、一歳年下であったディドロの方が指導的立場に立ち、ルソーは彼を全く信頼し、著述に際しては常に彼に助言を求めた。ルソーをして否応にも上流社交界に入らせる結果となった処女作「学問芸術試論」(Discours sur les sciences et les arts) を書くに至らせたいきさつを彼は次のように述べている。当時ディドロは、無神論的信条をつづった著書「盲人書簡」(Lettre sur les aveugles) のために Vincennes にある城楼に軟禁されていたのである。

「パリからヴァンセンヌまでは2里はある。……しばしば暑さと疲れとに負かされて、もうこれ以上は歩けなくなり、地面に大の字に倒れることがある。私(ルソー)は歩調をゆるめるために何か本を読みながら歩くことにした。ある日私はメルキュール・ド・フランス誌 (le Mercure de France) をもって歩きながら目を通し、ディジョンのアカデミー (l'Académie de Dijon) の懸賞問題にであった。『学問と芸術の進歩は風俗を頹廢させたか? 純化させたか?』(Si le progrès des sciences et des arts a contribué à corrompre ou à épurer les mœurs?) ……これを読んだ瞬間、私は別の世界を見、別の人間になった。……この時のことについて明確に憶えていることといえば、ヴァンセンヌに着くと私は精神錯乱の状態に近い程興奮していた。ディドロはそれに気づいた。私は彼にその理由を話し、とある檜の樹の下で鉛筆書きにしたファブリクス (Fabricus) の弁論を読んで聞かせた。彼は私に、そういった思想を發展させ、懸賞に応じるようにすすめた。」<sup>(2)</sup>

この問かけに対するルソーの答えは「否」であった。「われわれの学問と芸術とが完成に向って進んだだけ、それだけわれわれの魂は腐敗し、……その頹廢は学問芸術を所有している上流社会に於て最もはなはだしい。……」、とルソーは上流社交界を支配する形而上学、特殊な精神の働きのものを最下層の民衆の立場から攻撃する。

小心で人前では口もきけなかったルソーはこれを契機に敢然と社交界にとび込んで行く。そこに学説の誤謬と愚劣さ、のみならず虚偽を、即ち彼らの思想と行動との間の不一致性をみて、ルソーは自分の言動を傾聴させるため自分の行動を自分の主張と一致させる態度をとった。

「それまでは私はたゞ善良であった。しかしその後、私は道徳的になった。少くとも道徳というものに心酔した。私はお芝居はいっさいせず、あるがまゝの私になった。……大胆で、誇り高く、果敢になった私はどこへ行くにも自信をもって行った。この自信というのは純粋なものであって、私の立居振舞いに根ざすものではなくして、私の魂の中に根ざすものであったから、それだけますます堅固なものであった。」<sup>(3)</sup>

このはつらつたる社交人としてのルソーの活躍は彼の66年間の生涯のうちの1750年から1756年ごろに至る約6年間であり、第一番目の作品よりもさらに急進的で、そのために今度は受賞を敬遠さ

れたところの第2作『人間不平等起原論』が書き上げられたのもこの時期である。ルソーのこの初期の二つの作品は急進性、あるいは社会性に於て高い評価をうけているのであるが、第二作の執筆過程を次のように述べている。

「1日中、私は森の中にわけ入り、そこに原始時代のイメージをたずね……、そして人為的人間と自然のまゝの人間とを比較することによって、いわゆる『人間の完成』の中に人間の不幸の真の源があるのだということを人々に示す。これらの崇高な観想によって高められた私の魂は神の近くまで昇る。その高さからわが同胞を鳥瞰すると、彼らは各々、己の偏見、錯誤、不幸、罪惡の道を盲人のごとく歩んでいる。私は彼らに、彼らに聞えないくらいのかすかな声で叫ぶ。『おろかな方々よ、あなた方の不幸は全てあなた方自身に由来しているということを知りなさい』

このような瞑想から『人間不平等起原論』は生れたのである。(4)

第一作がそうであったように、ルソーの社会科学的性格の著書が、一種の瞑想状態、精神の極度に高揚した状態に於て書かれたことはこれらの書をして科学性よりも文学性を与へる結果となっている。彼の著書に対してデイドロは「枝葉が多すぎる」という批評をしているのであるが、ルソーは次のように答えている。

私自身も前々からそう感じていたのではあるが、これは熱におかされた状態でのおしゃべりであるから、これを書き直すことは出来ないのである。(5)

交友關係に於て、己に親しい者のみをよせ集めようとしたことをルソーは告白しているのであるが、著述に於ても、己独自の宇宙を創造しようとする芸術家的態度が見られるのであるが、デイドロの場合は関心の対象は現実の人間、社会生活を営むところの人間であった。1757年にデイドロが発表した戯曲『私生児』(Le Fils naturel) がルソーとの間に最初の不和を引き起こすのであるが、作中の人物をして言わせている「独りで棲む人間は悪人のみである」という科白は、丁度その時エルミタージュ (l'Ermitage) にひきこもっていたルソーをひどく怒らせることになった。このことは両者を決定的に決別させることにはならなかったが、各々の著述の姿勢の異質性を表わすものである。

「人間はそこから出発し、またいっさいをそこに帰着させなければならないところの唯一の項である。……私の存在と私の隣人同胞の幸福を除外して、自然のその他のものが私に何のかゝわりがあらう？」(6)

とデイドロは述べている。ルソーが形而上学の非難に於て、最下層の人々の立場をとることを言明しながらも常に彼らを見下す高踏的姿勢をとり、たゞ彼らを憐れむのみで、啓蒙活動の効果を信じていなかったのに対して、デイドロの場合は、彼らに共鳴し、自分は彼らと同じ立場に立つものであることを、小説「ラモーの甥」の中で次のように言っている。

「わしはハサミで木を刈り込む人間も、その木の葉を食う虫も、何もかもごっちゃに見えて、それぞれ自分の役目を果している二匹のちがった昆虫しか見えないような高い所からは物を見たりはしません。わしはこの世界にいて、ここを動きません。」(7)

また、「盲人書簡」(Lettre sur les aveugles) では次のように言っている。

「わが盲人はちょうど仲間の前へ出るように平然と役人の前に出頭したのです。役人のいかめしさが彼をたじろがすことはなかった。『私をどうなさるおつもりですか？』彼はエロー氏(パリーの警視總監)にいました。『地下牢にぶちこんでやるのだ』と役人は答えました。『どういたしまして、私は25年来(彼の年齢)そこにいるのですよ』と盲人は彼にやり返したのです。何という答えでしょう！何でもかでも道徳めいたことを好む私のような男があれば、なんとうってつけの教材でしょう！』(8)

さらに上流階級に占有された学問を無知識階級の立場に立って非難する。「いかにもあなたがたらしい、あなた方と同じ幸福がだれにでもあてはまるとあなた方は思っている。なんて奇妙な空想だ！あなたがたの幸福は我々の持ち合わせていない、ある空想的な精神の働きや、特異な魂や、特別な趣味があることを予定して上でのものだ。あなた方はこの愛てこなものを徳という名で飾り、それを哲学と呼んでいる。」<sup>(9)</sup>

ルソーは、学問の発達に社会の進歩に貢献しなかったどころか、道徳の頹廢、人間を悪人にすることにしか役立たなかった、と学問自体を否定し、そのような論文を書いた自分が、書くという学問的行為を行うことによって悪の行いをしたことを後悔しているのであるが、ディドロは学問の発達が社会に貢献し得ることを確信し、学問をその方向へ向けるべきこと、民衆に近づけるべきことを主張する。

「哲学を民衆のものにすることを急ごう、哲学がその為に質を落とすことを肯んじないなら、民衆をひきあげる努力をしよう」社交界に於けるディドロの姿は彼のこのような主張と一致したものであった。ネッケル夫人 (Mme de Necker) は次のように言っている。「才智のある人と一緒にいると私達の存在は上げられ、私達は自分自身の大きさを感ずる。特にディドロは周囲の人々を彼の高さに迄ひきあげ、彼らを温めるという形容のしようもない程の長所をもっている。」

ルソーのみならずヴォルテールもモンテスキューも、18世紀啓蒙思想家の多くが、急速に科学の発達したこの時代にあつて支配階級の意識の低さをなげき、これに支配された無知識層を啓蒙することに失望的となり、あるものは、「民衆に理解されぬ」ところの孤独な天才となり、あるものは己の王国に安楽な生活を送り、またあるものは趣味的学究におちこんでいった中であつてディドロは現実の社会を進歩しつつある社会のひとつの過程としてそのまま受け入れ、その中で自分の果すべき役割を心得ていた。「自分だけが賢者であるより、大勢の氣違ひにまじつて、自分もいっしょに狂っている方がめんどろを起さなくてすみます。」<sup>(10)</sup>

というディドロの言葉は任務を放棄したことを意味するのではなく、己の意に反して悪徳の弁護者となることを恐れたのである。

「一日か二日の間やつと外界を見た一人の人間が盲人達の国に紛れこんだとしたら、口を閉じて語らぬか、あるいは氣狂と見なされるか、どちらかの決心をしなければならぬでしょう。その男は日々何かの新しい神秘について彼らに教えるでしょうが、盲人たちにとってこそ一つの神秘ではあつても、無信仰者はそれを信じないことをもつて得意とするでしょう。(……) 暗黒の時代に真理を探り当てるといふ不幸をになつた人々の物語や迫害の事実、またその真理を同時代の盲人たちにもらした人たちの軽卒さを、その仮定があなたの記憶のうちによびさましてくるはずで、またその盲人たちのうちでも、身分や教育の点からいって、彼らの感情に最も近かるべきだと思われる者が、彼らにとって最も残酷な敵となつたのでした。」<sup>(11)</sup>

このような意識のもとでのディドロの啓蒙活動はどのような形態をとることになつたか。ひとつは百科全書の編集であつた。寄稿者182名、僧侶、貴族、ブルジョワ、職人の全ての身分の共同作業になるこの仕事は当時の知識の集大成にすぎず、急進的な部分があつても全体としてはかならずしもそうではなかつたのであるが、執拗な攻撃、弾圧を受けることになつた。しかしこれはディドロにとっては必要な「妥協の産物」であつた。

もうひとつのディドロの仕事は社会諷刺的、社会批判的著書であり、ここに於ては彼は禁欲的ではなかつたし妥協はしなかつた、そしてこれが、百科全書の出版のさまたげになることを考慮して、これらの著書を公にすることを自重し、その大部分が彼の死後、多くの歳月を経た後に日の目を見ることになつた。

ディドロとルソーとの間には以上のように啓蒙の姿勢に於て、従って各々の作品に於て、大きな異質性があるのであるが、他の啓蒙家にはみられず、両者にのみ等しくみられるものは強力な感情、あるいは熱狂性ともいえる気質である。ゲーテは次のように言っている。「ディドロは既に余りにも高くそびえていて、彼の地平線は余りにも広大であるから我々は彼とならんで座ることは出来ない程である。(……) ルソーとディドロは社会のこの政治的大混乱を予告させた。その社会にあっては存在していたものは全て亡びる運命にあったように思われる」

知性の時代、科学と進歩の時代、啓蒙の時代と評価される18世紀は、他方、その地上性のゆえに「感情の枯渇の時代」として不当な評価をうけてきたし、これは今日に於ても有力な18世紀観のひとつである。この時代にあって感性の優位性を呼んだのがルソーとディドロであり、ロマンチズムの時代の到来を予告するものである。感情と理性とに関する議論、即ち性善説、性悪説をめぐる論争はもう一つの課題である徳性とのからみ合いに於て、18世紀啓蒙家達の間でさかに行われたのであるが、ルソーの主張する性善説は極めて宗教的であり、本来善である筈の人間が社会を形成することによって不可避免的に悪になるという主張はかならずしも十分に説明されてはいない。ディドロの考察は科学的である。彼によると、パッションは自然界に於けるエネルギーと同一の性格のもので、それ自体は悪でも善でもないものであり、パッションを抑制することなく、自由に、自然のままに流出させることは徳を行うこととはかならずしも一致しないのであるが、パッションを抑制することは自然の摂理に反するものであると考えた。

「情念を破壊してしまおうなどと考えるのは狂気の沙汰である。何ものも欲せず、何ものも愛せず、何ものをも感じないために狂人のように自分を苦しめ、それがうまくゆけば、しまいには本物の化物みたいになってしまう信心家の計画はなんと立派であることよ。」<sup>(12)</sup>

「魂を偉大なる事物に向って高めるのはパッション (Passion)、偉大なパッションだけである。それがなければ風俗に於てであれ、作品に於てであれ、崇高なものは存在しない。芸術は幼児期に帰り、美德はこせついたものになる。」<sup>(13)</sup>

「それでは、と人は私に向って言うであろう、強烈なパッションをもつことはひとつの幸福なのか?と。然り、もしいっさいのパッションが一致しているならば、疑いもなくそうである。もろもろの情念の間に正しい調和を確立せよ。そして無秩序を恐れるな。」<sup>(14)</sup>

1762年頃彼が書いたといわれる小説「ラモーの甥」(le Neveu de Rameau) の結びの部分である「その不幸がこれから先40年だけでも続いてくれればよいが、最後に笑うものが大いに笑うでしょう」というボヘミヤンの言葉はきわめて暗示的である。1750年に前後する時期は啓蒙家達の受難の時期であったが、60年代から70年代にかけては彼らが勝利を博した時期であった。

彼らはひとつの高峰となり、社会の実体から遊離していた感があった。18世紀末に蜂起した大衆はこれらの啓蒙家達の思想を観念的にうけとめた人々ではなかった。彼らを指導したのは矛盾を身をもって感じとったところの三文文士達であった。彼ら、芸術や文学の落伍者達こそが、やがて新聞を編集し、革命クラブの演壇に登ったのである。

ディドロの著書はそのほとんどが対話か断片の形式をとっている。これは彼には思想的統一がなく、したがって体系を組み立てる能力がないためであるとか、怠惰な性格のためであるとかいう批判は、ディドロを、もしくは18世紀を評価することに消極的な人々によってなされたのみならず、ディドロを高く評価する側からも言われることである。彼の非体系性、即興性を強く指摘するのはブリュヌティエール (Brunetière) やモルネ (Daniel mornet) である。

「彼が一番不得手なのはひとつの観念を追うということであり、一点から他の点へと、そこへ導く道を通って行くということであり、寄生的な観念を投げ捨て、作品全体を一つの中心、または対象に関係させて秩序立てるということである。わが国のどんな作家もこれほどまで構成の技術を知

らなかったものはない。」<sup>(15)</sup>

モルネの場合はやゝ好意的である。

「我々は彼の中に、他人のためにはもちろん彼自身のためにも、一つの首尾一貫した体系を、いやそれどころか首尾一貫しているらしい見せかけをもった体系でもよいが、それを構築できた人間を見ることは断念しようではないか。彼の才能は別のところにあるのだ。……彼の場合は、恐らく他のどんな作家にもまして、その作品は性格を理解していなければ理解されえないだろう。」<sup>(16)</sup>

ディドロは自分の性格を次のように述べている。「ラングル人の頭は教会の風見の雄鶏が鐘楼の上に乗っかっているように彼の肩の上に乗っかっています。つまり彼の頭は決して一点に固定してはいないのです。そしてその頭が、離れ去った点に帰ることがありましても、それはそこに停まるためではありません。その動きや欲望や思想には驚くばかりの速度がありますが、口は重い方です。私はどうかと言えば、まさにこの生国の人間です。」<sup>(17)</sup>

ディドロが百科全書的性格の持ち主であることは一般に認められているが、これは彼が単なる平面的博識者であることを意味するのではない、彼は演繹的能力はもちろんのこと、それに劣らぬ帰納的能力も持っている。

グリムは次のように言っている。「もし人間の認識がいくつもの出来る観念の全てをうけ入れ、それを豊かにするに適した才能があるとすれば、それはディドロのそれです。彼はいまだかつて存在したうちで最も自然に百科全書的な頭脳を持ち主である。彼はすばやい洞察力、深い計算力、深求心、詩的概念、芸術趣味と古代趣味、をもっていて、対象がどのようなものであろうとも、彼の注意は同様のエネルギー、同様の興味、同様の容易さでもってその対象に結びつけられる。」

ディドロは社会科学的分野の著作と平行して常に自然科学の研究を続けていたのであり、彼の知識は観察と経験にうらづけされたものであった。この科学的批評家の能力をヴォルテールはいつも気にしていた。「私は、なんでも屋ディドロ (Pantophile-Diderot) のタンクレードに関する批評をいまかいまかと待ちあぐねている。全ては彼の才能の活動範囲内にある。彼は形而上学の高さから機織職工の仕事までやってのける。そしてそこから彼は劇場へ足をはこぶのである。」

彼が体系なるものを嫌ったのは、それが現実の多面性、多様性を十分に説明出来ないことを知ったためである。かってボヘミアンの生活にあって数学の家庭教師をしたこともあるディドロは「数学は、そこにあるのは物体から、その個別な特性がはぎとられているところの一種の一般形而上学である」と考えた。

彼にとっては真理は抽象的なものではなく、あくまでも現実の全てを包含したところの具体的なものでなければならなかった。そして、複雑な現実をありのままに表現しようと思えば、複雑なまゝの姿で矛盾は矛盾としてそのまま提示することが良心的であると考えた。「ひとは私に真理を探求することを求めるべきであって、それを発見することを求めるべきではない」<sup>(18)</sup>

ディドロは結論として捕えられる真理そのものよりも、それに至るプロセスの方を重要視する。彼にとっては、ラングル人の比喻にも見られるように、真理とは我々が決してぐらついたことのないものを言うのではなく、我々が絶えずそこにたちかえってくるようなものであった。偽から真へ、真から偽へと変転しながらさらに高い次元へと高まりつゝ捕らえられた真理だけが、矛盾に満ちた現実を真に説明し得るものであり、このような真理を読者に伝えるためには読者をしてその同じプロセスをたどらせる以外にはないと考えたのである。

このような、ディドロの批評家としての能力をテーヌは次のように評価している。

「彼は美しく、清い響きを愛する。彼は高貴な調べにたいする情熱に満ちている。彼は才知と同じだけの心をもっている。さらに、生のままの衝動を識別することが問題となっている場合には、彼は、哀れみ、同情、好意のために、独立した一段高い場所を自己愛とは別にしておくことに気を配る。」

「感情の枯渇」を非難される18世紀にあって、ディドロはルソーと共に、理性に対する感性の優位を主張したことは前に述べたが、ディドロの評価は純文学的分野に於てよりも批評的分野に於てなされる。

サント・ブーヴ (Bainte-Beuve) は次のように言っている。「ディドロ以前には、フランスの批評界はベール (Bayle) によって正確で、探求的で、精密であり、フェヌロン (Fénelon) によって優美で、美妙であり (……) しかし、それらのどこを見渡しても、生氣とか肥沃さとか洞察力とかは見られず、もしこう言うことが出来るとするならば、批評は魂を見い出さなかったと言える。批評に最初に魂を与えた人こそがディドロであった。」

以上のようなディドロ評価のもとに再びルソーとの交友関係にもどる。両者の交友関係の初期に於けるある出来事をルソーは次のように回想している。このときディドロはヴァンセンヌで軟禁されていて、ルソーは彼に面会にきたのであった。

「私は彼を強くだきしめ、一言も口をきくことが出来ず、ただ涙を流し、嗚咽するのみであった。なつかしさと嬉しさとで息がつまっていたのである。彼の反応はというと、彼は私の腕からでると、そこに居合わせたある聖職者の方をふり向いて、こう言ったものだ。『どうです、ごらんになったでしょう。私が友人達からいかに愛されているかということ』。私はすっかり感動してしまっていたので、自分の利益をはかろうとする彼のやり方に、その時は別に気にとめなかった。しかし、それ以来、その時のことを時折考えてみると、もし私がディドロだったら、いきなりあんな思いは私には起きなかっただろうといつも思うのである。」<sup>(19)</sup>

次にディドロの作品から引用しよう。「人間の本性の中に相矛盾した2つの原理があります。我々を我々に呼び戻す自己愛と、我々を外に向って拡げる好意とです。もし、これらの発条のひとつがこわれたら、人はメチャメチャに意地悪であるか、無分別なまでに寛大となるかでしょう。」<sup>(20)</sup>

ルソーの熱烈な抱擁を受けたあと、第三者である聖職者に声をかけたディドロのふるまいは、ルソーが批難するように、自分の利益を計かろうとするものではなく、第三者に対する配慮であり、百科全書編纂という形で、さまざまな階層の啓蒙家達を結集しえたディドロ独自の資質である。そして、もう一つは暖かき批評家の資質である。ルソーはたゞディドロのこのような暖かき魂を独占したかっただけである。「私生児」に於てディドロがルソーを暗に批判したことが両者の間に争いを生じさせ、この争いがディドロとルソーの異質性を表面化させたことは事実である。「独り棲むは悪人のみである」という論法に対してルソーは、彼が公にした啓学によっては、十分にディドロに反論することが出来なかったのである。ルソーがディドロを非難するのは、作者がこの文句を印刷した当時、孤独にひきこもった一友人をもっていたことに対してであった。「私はディドロを心から愛し、高く評価していた。そして私は、彼の方も私と同じ気持でいてくれるものと思っていた。……彼の方から決めた日に、待ちぼうけを食わされ、夕方になって一人で食事をする破目になることが月に三度四度と重なり、気を打ちひしがれていた私はサン・ドニ迄彼を迎えに行き一日中待ったあげく、私の心は彼からうけた無数の被害でいっぱいになった。……その不満を訴えるために私は彼に手紙を書いたが、書くと愛情がつわり、感情的になって、紙は涙ですっかりぬれてしまった。」<sup>(21)</sup>

ディドロはルソーへの返答の中で、お互いの人間観、社会観の間に相違があることを認めつつも「とにかく貴兄は、いつまでも私の念頭を去らない唯一の隠遁者である」と述べている。そして両者の間に交えられた論争は再会によって跡形もなく消えてしまう。

「ディドロはこころよく迎えてくれた。友にだかれると相手のとが何もふきとんでしまう。お互いにろくろく弁解もしなかった。」<sup>(22)</sup>

ディドロとルソーの間には他に幾つかの争いが見られるが、これらは、決して相入れない思想上

の違い、によるものではなくて、大部分がプライベートな性格のものであった。

しかし、だからといってディドロとルソーとが思想的に類似していると結論するつもりではない。著作活動に於ける二人の関係は師弟の関係に近いものである。良き影響を与え合った作家と批評家といえないだろうか。百科全書編纂の最大の敵であったパリソに対してルソーが好意的態度をとったため、ディドロはルソーをうとんずるようになったのであるが、ディドロとの交友が絶たれた後、ルソーは社交界に在って、発言したい欲求にかられながらも、その性格ゆえに発言できず、「こんな時にディドロのような人物がいてくれたら！」と告白していることは興味深い。

#### 引用文献

- (1) プレイヤード版, ルソー全集, p. 416
- (2) " " " p. 350—351
- (3) " " " p. 416—417
- (4) " " " p. 388—389
- (5) " " " p. 460—461
- (6) アセザ版, デイドロ全集, 第14巻 p. 453
- (7) プレイヤード版, デイドロ全集, p. 469
- (8) ガルニエ版, デイドロ著作集, 第2巻 p. 51
- (9) プレイヤード版, デイドロ全集, p. 422
- (10) アセザ版, デイドロ全集, p. 249
- (11) ガルニエ版, デイドロ著作集 p. 821
- (12) デイドロ著, 「哲学的思索」, 第5章
- (13) デイドロ著, 「哲学的思索」, 第1章
- (14) " " " 第4章
- (15) ブリュヌティエール著, 「フランス古典主義文学史」第3巻, p. 364
- (16) D. モルネ著, 「ディドロ, その人と作品」p. 11—12
- (17) アセザ版, デイドロ全集, 第18巻, p. 376
- (18) " " " 第1巻, p. 140
- (19) プレイヤード版, ルソー全集, p. 350
- (20) アセザ版, デイドロ全集, 第7巻, p. 181
- (21) プレイヤード版, ルソー全集, p. 455—456
- (22) " " " p. 460

(高知女子大学 フランス文学研究室)